

〔教育実践研究報告〕

精神看護学臨地実習終了後のレポート分析からみた学び

高橋 香織 片岡 三佳

What Students Learned from Psychiatric and Mental Health Nursing Practice

Kaori Takahashi, Mika Kataoka

I. はじめに

精神看護学が看護基礎教育の柱として独立して、10年目を迎えようとしている。精神看護学は、各大学のカリキュラム特徴を反映し、「臨床看護学」や「地域精神看護学」などの中に位置づいている。

本学の精神看護学実習は、3年次の領域別実習の中で、訪問看護実習、公衆衛生看護実習と共に地域基礎看護学実習という大きな枠組みの中に位置づいている。

精神看護学実習の実習場は、単科の精神科病院ならびに社会復帰施設である。そのため、対象は精神に障害をもった人たちである。学生が受け持つ対象の中には、急性期を脱した者や長期在院者、地域で暮らしている精神障害者が含まれることから、学生にとっては、対象の回復過程を含めた変化が学生の実習期間中には、みえにくいばかりでなく、学生が看護者の行っている看護実践や看護者の患者への関わりの意図がみえないため¹⁾に、

学生は精神看護の具体的な援助方法を理解しにくい傾向がある。そのため、実習目標の達成に当たっては、実習に携わる教員および臨床指導者を含めた指導者側の指導方法の工夫が問われる。

そこで、精神看護学実習終了時のレポート分析から、より学生が看護実践を理解できるよう、実習指導方法の検討に向けて、精神看護学実習の学生の学びを明らかにすることを目的とした。

II. 精神看護学実習の概要

1. 実習の目的・目標

実習の目的・目標は表1に示す。

2. 実習方法

1グループ6から7名で構成され、7から8日間の精神科病棟実習を行う。その期間で、それぞれが、1名の患者を受け持った。指導体制としては、1グループに、

表1 精神看護学実習の目的・目標

目的

精神障害によって日常生活や対人関係などに困難を抱えている対象に対して、その人の立場に立って、その人が望むその人らしい生活を追求するとともに、看護の役割課題を検討することができる。

対象との関わりの中で生じる自らの気持ちを見つめ、検討し、自分と対象との関係を吟味できる。

目標

1. 対象が持つ日常生活能力や対人関係能力を理解し、それを対象がどのように受け止めているかを理解できる。
2. 精神保健医療上の問題が対象の日常生活や対人関係にどのように影響しているか、それを対象がどのように受け止めているかを理解できる。
3. 対象が抱えている困難さを理解し、対象が望む生活が送れるための援助を考え、看護チームと共有しながら、その一部を実施できる。
4. 対象との関わりの中で生じる自らの気持ちに気づき、自己洞察を深めることができる。
5. 実践を通して見いだされた精神保健医療上の諸問題の解決にあたり、看護の社会における特質、ならびに、看護の現状から今後の課題を検討できる。

臨床指導者と教員1名が担当した。病棟実習の中間日には、社会復帰施設での1日体験実習を行っている。

Ⅲ. 方法

1. 研究対象

本研究の対象は、平成16年度、精神看護学実習を行った学生が最後に提出する実践を通した学びが記述された「精神看護学実習最終レポート」である。分析対象は、了解が得られた79名のレポート内容である。

2. 分析方法

分析方法として、質的記述的分析を行った。実習を通しての学びが記載されている内容に対して、内容・語彙の意味を変えないように要約し、1つの意味・内容を1データとした。1データに要約された内容のうち類似するものをまとめてサブカテゴリーとし、さらにカテゴリーへと抽象化していった。なお、カテゴリー化にあたっては、研究者間で合意が得られるまで検討を加えた。

3. 倫理的配慮

レポートを提出した学生に、研究の目的や個人が特定されないこと、拒否する権利があることや同意の有無が成績に関係しないことを、口頭と書面にて説明し、同意を得た。

Ⅳ. 結果

学びを抽出した結果、5つのカテゴリーと23のサブカテゴリーが抽出された(表2)。

【 】内はカテゴリーを、《 》内はサブカテゴリーを、「 」内はデータを表す。

1. 【対象との関係を築き、発展する方法】

【対象との関係を築き、発展する方法】には、《安心感を与える》《相手を尊重する》《関心を示す》《相手の状態・反応に着目する》《相手の気持ちを推測して関わる》《非言語的コミュニケーションの重要性》《技術としてのコミュニケーションの重要性》《信頼関係の形成が重要》《疾患の特徴を理解して関わる》《対象を理解するときの手段》《対象理解の重要性と困難さ》の11のサブカテゴリーが含まれる。

《安心感を与える》には、「その後もう一度丁寧に自己紹介しゆっくりと話をしていくと、Aさんから私に対しての質問が出るようになった。こ

表2 実習からの学び

【対象との関係を築き、発展する方法】

- 《安心感を与える》
- 《相手を尊重する》
- 《関心を示す》
- 《相手の状態・反応に着目する》
- 《相手の気持ちを推測して関わる》
- 《非言語的コミュニケーションの重要性》
- 《技術としてのコミュニケーションの重要性》
- 《信頼関係の形成が重要》
- 《疾患の特徴を理解して関わる》
- 《対象を理解するときの手段》
- 《対象理解の重要性と困難さ》

【自己理解の重要性】

- 《自己洞察の重要性》
- 《自分の捉え方が変わると対象の見え方が変わる》
- 《自己の課題を見つける》

【健康な部分に関わる必要性】

- 《健康な部分を維持・強化する関わり必要性》

【精神障害者が生活する場の現状と課題】

- 《社会復帰が困難な現状と長期入院による社会性の低下という悪循環の現状》
- 《安全・プライバシーを確保した環境整備の必要性》
- 《他職種・他施設との連携の必要性》
- 《精神障害者の正しい理解の必要性》
- 《早期発見・早期治療・再発予防の支援が必要》
- 《患者と家族の調整をはかる必要性》
- 《葛藤の中で提供される看護》

【看護師の力を実感】

- 《看護師の意識・対応によって変化する》

のことから、最初は相手に自分を知ってもらい安心してもらうことも大切であるということを実感した。」という内容が含まれる。

《相手を尊重する》には、「対象本来の姿を理解し、その人のペースに合わせたコミュニケーションの仕方が大切なのだということを学んだ。」という、相手のペースに合わせるという内容や、「入院という集団生活の場では、たとえスタッフが気をつけてみても集団の中で自発的に自己主張をすることが難しい患者は埋もれてしまいがちになり、状態が悪くなっていくということも考えられるため、患者を集団としてだけでなく常に個人としてみていくことが必要だと考えている。」といった相手をひとりの人として捉えることの重要性が含まれる。

《関心を示す》には、「患者にも自分があなたの話を聞きたい、分かろうとしているんだという姿勢を示し、

伝えることが大切だと感じた。」という関心を態度で示す必要性を学んだ内容が含まれる。

《相手の状態・反応に着目する》には、「普段のAさんの様子を、会話をしながら観察し、どのような表情で話されるかということを把握して、そうした時との違いを判断していくということが必要だと感じた。」という内容が含まれる。

《相手の気持ちを推測して関わる》には、「患者さんにとって一番いい生活を患者さんの立場に立って考えていくことが大切だと思った。」という相手の立場に立つという内容も含まれる。

《非言語的コミュニケーションの重要性》には、「コミュニケーションは言語的なものだけではなく、非言語的な部分も観察し意味を考え患者さんの気持ちや思いを理解していくことが大切だと思った。」という内容が含まれる。

《技術としてのコミュニケーションの重要性》には、「コミュニケーションを手段として用いながら、関係をつくり看護ケアを行っていくことの難しさを学んだ。」「対象が最も望んでいることを把握しケアができるようにするために、関わる人がコミュニケーションスキルを持っていなければ、見つけることが困難であることが実感できた。」という内容が含まれる。

《信頼関係の形成が重要》には、「信頼関係があれば語ってもらえるというものではないかもしれないが、信頼関係があるからこそ患者さんが話してくれるということもあると思ったので、患者さんと関わる時には、いかに関係をつくっていくかということが大切である。」という内容が含まれる。

《疾患の特徴を理解して関わる》には、「患者は、精神機能の障害が社会生活能力、対人関係能力、作業能力の障害となってあらわれるため、日常生活上に困難を及ぼす。このように、疾患だけでなく、生活のしづらさという二次的障害を抱えてしまう。」という、病気の特徴を理解して関わる必要性や、「その人の思いや気持ちを大切に、その人の疾患の時期や段階、生活というものをトータル的に見て関わっていくことがとても大切だということを感じた。」という病気の時期や、段階にあった関わり方の必要性を学んでいた。

《対象を理解するときの手段》には、「今の患者さん

のおかれている状態は病気からくるものだけでなく、今の生活環境や入院歴、その人の生活歴、家族関係、その人自身の性格、価値観など、いろんなことがからみあっていて、単純なものではないから、いろいろな視点から総合的に患者さんを知ることが大切だと思った。」という内容が含まれる。

《対象理解の重要性と困難さ》には、「私は実習に看護の基本である相手の立場に立って考えるという課題をもって臨んでいた。課題は完全には達成できなかったと思う。この課題を達成するには相手のことを理解することが前提だが、その難しさを実感した。」という内容が含まれる。

2. 【自己理解の重要性】

【自己理解の重要性】には、《自己洞察の重要性》《自分の捉え方が変わると対象の見え方が変わる》《自己の課題を見つける》の3つのサブカテゴリーが含まれる。

《自己洞察の重要性》には、「自分がなぜそう考えたのか、どうしてその行動をするのか自分で自覚していないと、勝手な思い込みで動いてしまうような気がした。実習を通じて自己洞察をする大切さを学んだ。」という自己洞察の重要性を述べた内容が含まれる。

《自分の捉え方が変わると対象の見え方が変わる》には、「患者さんと関わる時に自分というものさしがそこに加わってしまうことで患者さんがどんな風にも変化してしまうのだと思った。」という自分の捉え方で、対象の捉え方が変わってくるという内容が含まれる。

《自己の課題を見つける》には、「今回、自分がうまく働きかけることができなかったということから、実感したが、今後の実習の中で少しずつでもできるようになっていければと思う。」「妄想のような非現実的な会話の中では、妄想をすぐ否定せずそのなかにAさんが伝えたいことがあると考え、最後まで聞くようにした。聞いていくと、妄想のなかにも、自分を責めたり、自分を脅かすような発言があり、不安や悲しみが存在していた。しかし、その言葉に対して、どう反応したらよいか为难しく、これについてはこれからも考えていきたい。」という自己の課題を述べた内容が含まれる。

3. 【健康な部分に関わる必要性】

【健康な部分に関わる必要性】には、1つのサブカテゴリー《健康な部分を維持・強化する関わり方の必要性》

が含まれる。

《健康な部分を維持・強化する関わり必要性》には、「その人が本来持つ力を引き出していくことの大切さも学ぶことができたと思う。患者さんに働きかけていく際、つい病的な部分にばかり目がいてしまうことがある。病気からくる部分はどこなのかを把握していないと、このような点ばかり見てしまう。しかし、実際患者さんには、相手を気遣う力や、優しさをいっぱい持っていると感じた。患者さんの健康な部分にも目をむけ、その面を強化していく関わりも非常に大切だと実感した。」という内容が含まれる。また、「Aさんは頭痛などの症状に自分で対処しようといろいろと工夫されているところがあり、そこから患者さんが自分で症状や現象などに対処できるということが生活のしずらさを取り除くためには必要で、そこに関わっていくことで患者さんが社会生活を継続していけるのだと感じた。」という対処方法を考え強化する関わりが必要であるという内容が含まれる。

4. 【精神障害者が生活する場の現状と課題】

【精神障害者が生活する場の現状と課題】には、《社会復帰が困難な現状と長期入院による社会性の低下という悪循環の現状》《安全・プライバシーを確保した環境整備の必要性》《他職種・他施設との連携の必要性》《精神障害者の正しい理解の必要性》《早期発見・早期治療・再発予防の支援が必要》《患者と家族の調整をはかる必要性》《葛藤の中で提供される看護》の7つのサブカテゴリーが含まれる。

《社会復帰が困難な現状と長期入院による社会性の低下という悪循環の現状》には、「やはり長期入院の人に対するアプローチの仕方が課題として考えられる。長期入院によって、世代交代し帰る場所、受け入れてくれる家族がなくなってしまうこと、対象者自身が病院にいることに依存的になること、社会復帰に向けての意欲の低下や対象にあった施設が不十分であることなど、様々な問題を引き起こしていると実感した。」という内容が含まれる。

《安全・プライバシーを確保した環境整備の必要性》には、「入院という環境は精神疾患の患者さんには特に大きなストレスとなると思う。ストレスによって患者さんの状態が悪化することは避けなければな

らないことだと思う。患者さんが安定していただけるよう、安全を確保すること、そのための環境を整備していくことも日々の看護の中では大切なことだと思った。」という、安全を確保するための環境整備が必要であることや、「処置時に、皆がいる中でお尻を出して処置をする姿が見られた。本人さんもそれが当たり前のように下着を脱いでいた。環境（設備）の問題もあるけれど、人間が生きていくためにはプライバシーを保護することとは必要だと感じた。」という、プライバシーの保護が不十分な看護師の対応から、逆にプライバシーの保護や、その重要性を学んでいた。

《他職種・他施設との連携の必要性》には、「そのような明確な情報を得るためには、看護職間での連携に加え、主治医、家族、福祉、訪問看護など、他職種との連携を密にし、情報交換をしていくことが大切だと思った。」という内容が含まれる。

《精神障害者の正しい理解の必要性》には、「地域住民や一般の人に正しい知識を得てもらい、精神疾患について理解してもらう必要がある。」という課題を学んでいる。

《早期発見・早期治療・再発予防の支援が必要》には、「病状が悪化してきてひどくなる前に入院するというのもいいけど、悪化する前の段階で対処できるように、在宅での療養に対する支援が確実にになると、再発の予防にもなるのではないかと思った。」という内容が含まれる。

《患者と家族の調整をはかる必要性》には、「退院後患者が望む生活ができるように、患者の希望も聞いていき、また、家族との調整もはかり、患者・家族にとって一番良い方法を考えていく必要がある。」という、患者・家族との調整をはかる必要性を学んでいる。

《葛藤の中で提供される看護》には、「たった2週間の実習でさえ『とりあえず、このままがいいのかな。』と思ってしまうのだから、現場の看護職にはもっと葛藤があるのだと思われる。」という内容が含まれる。

5. 【看護師の力を実感】

【看護師の力を実感】には、1つのサブカテゴリー《看護師の意識・対応によって変化する》が含まれる。

《看護師の意識・対応によって変化する》には、「患者さんとゆっくりと話す時間が必要であり、それについても看護師側が時間を作っていくなどの工夫が

必要であると思う。」という、看護職が対応・業務を工夫する必要があることや、「どの障害にも共通なことだが、特に精神疾患を持つ方は、やりたいことを制約されることが多くあると分かった。それは、本人自身ではなく疾患を見て周囲の関わっていく人々が無理だ、できないと判断してしまうからだと思った。患者さんの抱える問題よりもはるかに関わる側の問題のほうが大きいと思った。」という看護師の意識の問題である内容が含まれる。また、「病棟の環境の現実を見て、疑問に思うことはたくさんあったが、それを現場の看護職はもちろんそれでいいとは思っていないし、その現実の中でも工夫をしてその中でいかに良くしていくかを考えているということを知ることができた。」という看護師の前向きな姿勢を知ったという内容が含まれる。

V. 考察

以上の結果と精神看護学実習の目的・目標との関連性を検討することにより、学生の学びを明らかにし、精神看護学実習の課題を検討する。

1. 精神看護学実習の学生の学び

学生は、対象との関わりを通して、「関心を示す」「相手の状態・反応に着目する」といった相手に関心を示し、「相手の気持ちを推測して関わる」ことで、相手の立場に身を置き、どうしたら相手に受け入れられるかという方法を模索しながら、相手に「安心感を与える」「相手を尊重する」「疾患の特徴を理解して関わる」などの、自我が弱いといわれる精神障害者の特性を考慮し、より対象を理解するために、生育歴や家族歴などの情報を収集するといった「対象を理解するときの手段」を学んでいた。これは、対象との関わりを通して【対象との関係を築き、発展する方法】であり、対象理解の過程にある要素を学生は、充分とはいえないが、体験し学んでいたといえる。また、精神障害者との関わりから、精神機能の障害からくる、対人関係形成の不得手さを理解し、「非言語的コミュニケーションの重要性」「技術としてのコミュニケーションの重要性」「信頼関係の形成が重要」「対象理解の重要性と困難さ」を実感していたと思われる。そして、精神障害者の対人関係形成の不得手さは、疾患からだけではなく、精神障害者が置かれている

人とのつながりが希薄であるという社会背景も影響しているということを学生は理解し学んでいた。

このことは、実習目標1および2に掲げられているように、対象がもつ日常生活能力や対人関係能力を理解したり、精神保健医療上の問題である社会的入院や精神障害者への偏見、精神医療の歴史などが、対象の日常生活や対人関係にどのように影響しているのかを理解することと関連した学生の学びである。

そのなかで、学生は、精神保健医療上の問題を含めた対象がもつ日常生活能力や対人関係能力に関して、問題点ばかりをみつめるのではなく、患者の持っている力や健康的側面にも着目することができていた。【健康な部分に関わる必要性】には、学生が、対象者と共に対処方法を考え、健康な部分を維持・強化する看護援助の必要性を学んでいた。このことは、問題志向型の看護過程の展開では対象者が病気であるということだけを捉えがちになるが、それだけではなく病気と共に生活していく生活者として捉えているからこそその学びであると考えられる。

【自己理解の重要性】には「自己洞察の重要性」「自己の捉え方が変わると対象の見え方が変わる」「自己の課題を見つける」があり、学生は、自己理解の重要性を学んでいる。このことは、実習目標4に掲げられているように、対象との関わりの中で生じる自らの気持ちに気づき、自己洞察を深めることと関連した学生の学びである。自己理解の重要性は、Joyce Travelbee²⁾が治療的な自己利用として述べており、自分自身を治療的に用いるには、自己洞察、自己理解、人間行動の力動性の理解、他人の行動はもちろん自分の行動を解釈する能力、そして看護場面に効果的に介入する能力を必要としており、治療的な自己利用に向けた学びとなっていた。

【精神障害者が生活する場の現状と課題】での「社会復帰が困難な現状と長期入院による社会性の低下という悪循環の現状」「安全・プライバシーを確保した環境整備の必要性」「他職種・他施設との連携の必要性」「精神障害者の正しい理解の必要性」「早期発見・早期治療・再発予防の支援が必要」「患者と家族の調整をはかる必要性」「葛藤の中で提供される看護」および【看護師の力を実感】での「看護師の意識・対応によって変化する」は、実習目標3および5に関連していた。「看護師の意識・対応によって変化する」は、実習目標3に掲げ

られているように、看護チームと共有しながら、その一部を実践した結果であると考ええる。しかしながら、具体的な看護師の行為に関する記述が少なかったことは、精神看護に特徴的な看護者の行っている看護実践やその意図が見えない³⁾ことが影響しているように考えられた。【精神障害者が生活する場の現状と課題】は、実習目標5に掲げられるように、「社会復帰が困難な現状と長期入院による社会性の低下という悪循環」「安全・プライバシーを保護した環境整備の必要性」「他職種・他施設との連携の必要性」「精神障害者の正しい理解の必要性」「早期発見・早期治療・再発予防の支援が必要」「患者と家族の調整をはかる必要性」「葛藤の中で提供される看護」といった、精神保健医療上の現状を学生は、実習での実践を通して学んでいた。これらの精神看護の現状から、看護がどのような役割を担っていかなければならないかを、学生は、検討していた。

2. 地域基礎看護学実習の中での精神看護学実習の学びの特徴

本研究で導き出された精神看護学実習での学びは、【対象との関係を築き、発展する方法】【自己理解の重要性】【健康な部分に関わる必要性】【精神障害者が生活する場の現状と課題】【看護師の力を実感】のカテゴリーであった。本研究と同様に実習終了後のレポート分析を行った他の研究をみると、入澤らの研究⁴⁾では「精神看護における看護者の姿勢と役割」「他者理解に向けた具体的手段」「対象理解・人間理解」「精神医療の実際」「自己と他者の関係及び相互作用」「患者を取り巻く相互の連携」「自己調節・自己理解」の7カテゴリー、滝下らの研究⁵⁾では、精神看護における「援助内容」「患者－看護者関係」「対象」「社会復帰」「概念・機能」「看護者の要件・資質」「実習の評価・感想」の7カテゴリーが導きだされていた。これらの先行研究と比較すると、対象との関わりを通して対人関係の築き方、自己理解を中心とした人間理解を学ぶことをベースに精神看護の実際を学んでいたことが共通の学びとして考えられる。

一方、特徴としては、本研究でカテゴリーとして導き出された【健康な部分に関わる必要性】および【精神障害者が生活する場の現状と課題】がある。

【健康な部分に関わる必要性】では、他の研究ではサブカテゴリーとして抽出されていたが、本研究ではカテゴリーとして抽出されていることに注目したい。前述したように問題志向型の看護過程においては、学生の関心が患者の問題に向く傾向にあるが、本研究においては、精神看護における健康な部分に着目する必要性を学生自身が学んでいた。このことは、入澤⁶⁾も述べているように、学生が患者－看護者間の相互行為に参加して、患者をひとりの人間として理解し、病的な部分にとらわれない看護の対応に気づき、知識としての患者理解のレベルから、実践を通した患者理解へと深まったことを示唆している。

また、【精神障害者が生活する場の現状と課題】では、学生は精神医療として狭義に現状を捉えるのではなく、それも含めた幅広い視点で、人間が生きるベースである生活・生活者の視点で現状と課題を考え、学んでいた。

精神障害者の生活する場の現状と課題に気づき、対象を生活者として捉え、健康な部分を強化する関わりに着目した学生の学びは、近年、精神病は、高血圧症や糖尿病と同様の慢性疾患であり、疾患によっては一生治療の継続が必要な場合もある⁷⁾とされているように、精神疾患もひとつの慢性疾患のごとく病状を消去するのではなく、日常生活のストレスを上手に対処し、服薬を継続するなどして、病気・障害が安定した状態であることが、地域生活を可能にしていく⁸⁾ことから、病気とつきあう・病気とともに地域で生活を送ることができるような援助が一方では求められていることを反映していることが考えられた。それとともに、従来、臨床看護学の一つとして精神看護学が位置づけられることが多かった場合と異なり、その人の立場に立って、その人が望むその人らしい生活を追求するという地域基礎看護学の中に位置づけられているからこそ、強調された部分もあるのではないかと考える。

本研究の限界は、実習記録が分析対象となっているため、必ずしもそこに表現されているとはいいがたく、自ずと限界がある。しかし、今回、得られた学生の学びの結果を基礎資料として、精神看護学実

習の学びが深められることができるように、教育活動を検討していきたい。

VI. まとめ

本研究では、精神看護学実習での学びを明らかにするために、精神看護学実習最終レポートから学びに関する質的記述的分析を行った。その結果、【対象との関係を築き、発展する方法】【自己理解の重要性】【健康な部分に関わる必要性】【精神障害者が生活する場の現状と課題】【看護師の力を実感】の5つのカテゴリーが抽出された。

これらのことから、学びの特徴としては、【健康な部分に関わる必要性】および【精神障害者が生活する場の現状と課題】であると考えられた。

今後の課題として、学生にとってイメージしづらい精神症状を理解することは困難であるため、精神疾患が対象の日常生活にどのように影響しているか、それを対象がどのように受け止めているかについて、さらに教育的な関わりが必要であると考ええる。また、現在、地域連携や地域精神保健の重要性が指摘されるなかで、本学の精神看護学の位置づけを考慮したとき、連携から協働という視点での学びに発展・強化するといった教育的介入の必要性が示唆された。

謝辞

本研究にあたり、ご協力をくださった学生のみなさまに感謝します。

文献

- 1) 森千鶴：看護学実習シリーズ2 精神看護学実習指導案の作成と展開，教育メディア；1，1997.
- 2) Joyce Travelbee：Interpersonal Aspects of Nursing，1971，長谷川浩，藤枝知子訳，トラベルビー 人間対人間の看護；23，医学書院，1974.
- 3) 前掲 1).
- 4) 入澤友紀，二渡玉江：精神看護学実習における学生の「学び」の分析－実習終了後の記録物の分析を通して－，群馬県立医療短期大学紀要，9；65-72，2002.
- 5) 滝下幸栄，山田京子：精神看護学実習における学習内容の評価，京都府立医科大学看護学科紀要，12；55-63，

2002.

- 6) 入澤友紀，田村文子：精神看護学実習における学生の「学び」の内容分析－感想文における患者－看護者の相互行為に参加しての「学び」－，群馬県立医療短期大学紀要，10；71-79，2003.
- 7) 川野雅資：看護観察のキーポイントシリーズ〔改訂版〕精神科Ⅱ，中央法規出版；20，2005.
- 8) 池邊敏子，グレッグ美鈴，高橋香織，他：精神障害者の地域生活支援の構造－グループホームでの支援実態から－，岐阜県立看護大学紀要，4(1)；13-19，2004.
- 9) 戸田由美子：精神看護学実習Ⅱの学び－患者－看護学生関係の発展段階を中心に－，香川医科大学看護学雑誌，5(1)；185-197，2001.

(受稿日 平成 17 年 9 月 5 日)

(採用日 平成 17 年 10 月 26 日)